

ア！ 安全・快適街づくりニュース

Ah! Safety and Amenity Machizukuri News

5月20日平成21年度総会開催 —人間国宝・小宮康孝氏の示唆に富むお話を楽しむ—

「ア！安全・快適街づくり」は、5月20日14時から大成化工株式会社厚生棟会議室で、平成21年度の評議員会、理事会、総会を地元の皆さんも大勢参加して開催されました。

開会に先立ち、葛飾区在住で人間国宝・江戸小紋染師の小宮康孝さんをお招きし、「人生の贈り物」と題してお話を伺いました。

さらに、日本女子大学名誉教授（当NPO評議員）の小川信子さんと東新小岩七丁目町会長の中川栄久さんを交えてトークセッションが行なわれました。（概要は本号P. 5~8に掲載）

次いで評議員会に入りましたが、議事に先立ち石川理事長は、最近の注目すべき動きとして次の事項を挙げました。

◇ 新しい断層が次々と発見され、それらの断層の搖れが阪神淡路級のものが多く、地震予知が無理ではないかと思われてきた。

◇ 堤防は、原発の様な点とは異なり線なので、どこかで断層と交わる危険性が高い。加えて東海、東南海、南海、首都直下地震が連動して起こる可能性も指摘されている。その場合、比較的小さいと思われていた直下型地震のマグニチュードも増幅されかねない。



総会の会場風景

◇ 水害については、21年1月に国土交通省による荒川堤防決壊時の被害想定が発表になった。

そこで初めて海拔0m地帯の浸水被害が取り上げられた。しかし、マスコミでは大きく報じられず、銀座の浸水のみが話題になった。

◇ 専門調査会の各自治体へのアンケート調査では、緊急避難先としてマンションが必要だとする自治体が54%であったが、受け入れについての話し合いは殆ど行われていない。

広域避難についても、避難先自治体との連絡はとれておらず、誘導のマニュアルも出来ていないことが浮き彫りになった。

◇ 海外0m地帯での堤防決壊による被害は、富士山の噴火のもたらす被害より深刻なものがある。今後の課題として、対策を具現化するためには、そこに住んでいる住民が声を上げることが必要である。葛飾区ももっとそれを支援する情報発信をしてほしい。

* * * *

その後、順次評議員会、理事会、総会で議案が審議され、20年度事業報告、20年度決算、監査報告、21年度事業計画、21年度収支予算、定款の一部改定、役員の選任について原案通り承認されました。

この間、一般会員や地元の方から「ア！安全・快適街づくり」の総集編成の要望、ワークショップやGISといった新しい活動についての説明要請、地域の底力再生事業への取組み方等に関する質問・要望があり、熱心な質疑応答が行なわれました。

議案審議終了後、新たに理事に就任された 加藤孝明さん（東大大学院助教）の挨拶があり、さらに、長年当NPOのホームページの巻頭を飾る絵を提供して頂いた伊藤良子さんに感謝状が贈呈され総会は終了しました。

この後、恒例の懇親会が開催されました。

人間国宝の小宮さんも参加され、新たに会員となられた地元のご婦人から元気なご挨拶もあり和気藹々のうちに終了しました。

…4月19日新小岩北地区センターで…

第6回ワークショップ開催

テーマ「GIS（地理情報システム）を利用した 防災地図作成と水害時の避難対策」

GIS（地理情報システム）を利用して防災地図を作成し、それをベースとして水害時の緊急避難対策を考えるワークショップが4月19日新小岩北地区センターで開催されました。

これは日本開発構想研究所からシステム開発の協力要請を受け、「東新小岩七丁目町会」をモデルにして行なうもので、東新小岩七丁目町会が主催し、（財）日本開発構想研究所、広域ゼロメートル市街地研究会及び当NPOが共催して実施されたものです。

当日は、13時から同町会の住民40名とワークショップ支援者18名が参加しました。

参加者は4班に分かれてグループ討議を行ないました。住民の皆さんの水害への関心の高まりとGISにより目に見える情報を得ながら討議されることにより、期待以上の成果を得ました。

班別の討議に先立ち、中川東新小岩七丁目町会長がGISを用いて総合説明を行いました。

中川町会長は、区レベル、地域レベル、町会レベルの状況について、地理情報を自在に操りながら、「あなたの家はここ」といった地元の実情を熟知した人ならではの分かりやすい説明をされました。

このあと、参加者は班別に分かれて、ワークショップが始まりました。GISのプロジェクトに仮想被害の状況が流れ、水が襲ってくる時間をシミュレーションして、2時間後、3時間後と進み、水没建物が増えてくると、参加者から「あーあ！」という声が連発されました。そして、東新小岩七丁目で生き残っている建物はどれか、スポーツセンターはどうか等避難先として自分の見知った建物をイメージしていました。

また自宅周辺をクローズアップし、浸水の深さ、何分で浸水するか、その間にどこまで逃げられるかを確認していました。

さらに災害情報の入手方法、避難の方法、水・食料の備蓄倉庫の位置、高齢者、乳幼児、障害者等要介護者の実態把握や対応策について話し合いました。



● 参加者の声

- ◇ 要介護者の把握は重要であるが、今回は任意回答による七丁目町会のアンケート調査であり、今後どうするかが課題である。
- ◇ 個人情報の保護に関する法律が施行されてから、要介護者の把握も容易ではない。
- 行政や民生委員との連携も必要である。
- ◇ 現状では、災害予告時に、要保護者を先行的に避難させない限り、自助、共助の能力を超える課題となる。
- ◇ 何処が決壊すると、何分後に何センチ水が上がるのかシミュレーションとして正確な情報が必要である。
- ◇ 七丁目町会1,300人は、何処に、どのようにして避難するか、具体的なイメージを共有しておきたい。普段から避難可能な建物を理解し合っておく必要がある。
- ◇ 高層住宅でも、トイレや電気、水道など生活インフラは使えなくなるだろう。消防署は手が回らないだろう。商店街は、いざ水害が来たら、いち早く食料や水等を安全な場所に確保して、地域のために役立てほしい。
- ◇ 地震の場合は、3日間自助努力すれば公助があると想定されているが、水害は水が引くのに3週間かかるかも知れない。

避難先が近くのマンションの場合、避難期間に限界があり、マンション住民の食料・水等のケアも必要である。



中川さんの説明を聞く会場風景

第7回ワークショップ開催

* * * 5月17日(日) 新小岩北地区センター * * *

テーマ「身近なところで今後の進めるべき対策を検討する」

平成21年5月17日(日)、葛飾区新小岩北地区センターを会場として、ワークショップ「身近なところで今後の進めるべき対策を検討する」が開催され、上小松、東新小岩五・七・八、西新小岩3・4・5丁目から38名の方が参加しました。

このワークショップでは、水害防災に関するこれまでの取組みと到達点、行政による取組み状況の確認を行い、町会での取組みと課題について議論をしました。その概要をご紹介します。

●第1部：情報の共有

〈これまでの取組みの到達点〉

東京大学の加藤先生から、防災活動における自助(個人が行なう取り組み)、共助(地域が行なう取り組み)、公助(行政が行なう取り組み)の現状とあるべき姿について次の点について説明がありました。

- ◇ 東京のこれまでの防災訓練は、地震訓練が中心であり、今後は水害についても訓練を行なっていく必要がある。
- ◇ 水害防災では、自助・共助・公助の連携が必要不可欠である。
- ◇ 新小岩北地区で2006年からワークショップを開催して取組んできた内容と今後の目標を確認する必要がある。

〈公助の取組み状況〉

葛飾区の村杉氏、三浦氏から公助の取組み状況について次の様な説明がありました。

- ◇ 葛飾区で水害が発生しそうな時は、区が配布している洪水ハザードマップに記されているように、水害が発生する前に、避難勧告・指令が発令され、安全な場所に避難することになっている。
- ◇ 避難先として、市川市や松戸市の高台が考えられており、葛飾区の方で避難場所の調整を行なっている。
- ◇ 援護を必要とする方の避難については、公助と自助・共助の協力が必要である。
- ◇ 水防のための備蓄倉庫は、区内に9箇所が設置されており、土嚢も準備されている。
- ◇ 消防と連携して水防訓練が行われている。
- ◇ 中川護岸耐震補強工事と併せて親水テラスが設置された。

●第2部：テーブル論議

第1部で水害に関する意識と情報、取り組み状況を共有したところで、町会毎のグループに分かれてテーブル論議を行ないました。

各町会では、町の安全に向けた取り組みが進められており、一層の進展が期待されます。

しかし、一方では、町会の活動に積極的に参加していない住民、同じ状況におかれている近隣地域への展開が課題とされています。

そこで、第2部では町会毎に、(1) 町会での取組みとその課題、(2) 今後取組むべき課題、(3) 具体的な進め方(第一歩の進め方)について論議しました。

●第3部：ミニシンポジウム

第2部のテーブル論議の結果を各テーブルの代表者が発表し、情報を共有しました。

町会で行われている取組みには、水位ポールの設置、要援護者の所在の確認、高層マンションへの避難の口約束、防災訓練への参加、洪水ハザードマップの保管等がありました。

地域での水害情報の共有や要援護者の所在の把握などが思うように進まないことを課題として上げているグループが多数見受けられました。

今後の取り組みの進め方としては、

- ◇若い世代を取り込む。
- ◇PTAとの連携といった町会の枠組みを超えた活動を行う。
- ◇取り組みが進んでいる町会を参考にする。

等が上げられました。

質問には、行政が持っているデータを町会で使うことは出来ないか。他の町会と連携したいが、どうすれば良いか等があり、今後の取組みにつなげていくための前向きな姿勢が見受けられました。

最後に、各町会での今後の取り組みおよび新小岩北地区連合町会としての今後の取り組みを語っていただきました。

新小岩北地区連合町会が主催

11月15日災害時避難訓練実施

避難先は松戸市21世紀の森

◇◇◇東京都地域の底力再生事業として◇◇◇

新小岩北地域は、工業用水等の過剰汲み上げにより地盤沈下し、満潮時に堤防が決壊すると水深3mになる街です。

区が配布したハザードマップによれば、全域が水没するため、避難先として隣接の市川市、松戸市を想定しています。

2005年に米国ルイジアナ州を襲ったハリケーン・カトリーナによる高潮時には、多くの住民が車で避難したため、橋のたもとで渋滞し、多くの人が水死しました。

それを教訓に、葛飾区では早めに公共交通機関を利用して避難するよう呼びかけています。そこで、避難をスムーズに行なうためには、経路や避難先の確認が必要です。

また、一旦浸水すると締め切り堤が完成するまで海水が毎日浸入するため、長期間の避難となりますので、避難生活の体験も必要です。

葛飾区&NPO協働事業

< 平成22年度に実施 >

- ☆パネル展示
- ☆ハザードマップ配布
- ☆アンケート調査

葛飾区は、平成22年度に荒川、中川、綾瀬川、江戸川を纏めたハザードマップを作成し、配布する予定です。これに併せて行なわれるアンケート調査およびパネル展示について、当NPOが協力することになりました。アンケート調査とパネル展示は、区内19地区の連合町会で行われる予定です。

パネル展示は総計95日間にわたり開催されますが、各地区で来場者に説明する人は、出来るだけ地元町会の方にお願いする方向で関係者が調整しています。

このため、連合町会では、松戸市21世紀のフリーゾーンを避難先として、災害弱者の現状把握、避難援護の希望の有無など自己申告の重要性を再認識し、健常者がどのようにフォローすれば良いかを研究し、避難訓練を実施することになりました。

さらに、所轄消防署の指導を受けるとともに、実践を通じて避難時に必要な情報がどの様なものか、事前に準備すべき事柄や器具の再確認をします。

参加者にはアンケート、リポートをお願いして、その成果を確認します。次に区の配布したハザードマップの地域での浸透度・利用状況を把握して避難計画の改善点を探ります。

なお、この事業は、東京都の「地域の底力再生事業助成」対象事業へ応募し、採択されたため、都の助成を受けて実施されます。

高台へGO！
11月15日（日）
〈新小岩→松戸市21世紀の森〉
公共交通機関を利用した
荒川水害想定避難訓練

「平成21年度地域の底力再生事業助成」

対象事業

主催 新小岩北地区連合町会
共催 ア！安全 快適街づくり
協賛 東京都 葛飾区
◎訓練の詳細は
町会にお問合せください。

人生のおくりもの

小宮康孝（人間国宝 江戸小紋染師）

5月20日に開催された当NPOの平成21年度総会では、開会に先立ち葛飾区西新小岩に在住の人間国宝の江戸小紋染師小宮康孝さんをお招きして「人生のおくりもの」と題しお話を伺いました。その後小川信子さん（日本女子大学名誉教授・当NPO評議員）と中川榮久さん（東新小岩七丁目町会長）を交えてトークセッションが小宮さんのお話を中心にして渡邊喜代美さん（当NPO理事）の司会で行なわれました。その概要をご紹介します。

〈総会基調トーク〉

ご紹介いただいた小宮です。本当は立ち上がって、皆さんにご挨拶しなければいけないんですが、座ったままで失礼します。

私は自分のことを棚に上げて、人の悪口を言うのが趣味で、あまり言い過ぎてバチが当たったのか脳梗塞になったんです。

麻痺した身体を病院のベッドに横たえながら自分の人生は何だったのかなと考えました。

私は何も能のない人間で、親父の残してくれた着物にかじりついて、綿々とやってきました。それなのに人間国宝なんて有り難い勲章や東京都の文化賞をもらい、名譽都民になりましたので、私の人生は棚からぼた餅だったんじゃないかなと思いました。

日本に昔から残っている文化を何とか次に伝えたいということで、私は認定書を頂きました。これをいただいた人間は、その文化を守る義務があると、私はそう思っています。

江戸小紋を守ろうとすれば、一番大事になるのは、やっぱり、お客様に喜んでもらうことですが、江戸小紋を染める人間が楽しく仕事が出来る様にしなかったら続きませんよ。

江戸小紋の型紙というものは自由な物です。江戸から現代までの型紙を見てみると、江戸時代の型紙には非常に優秀な物がある。

日清戦争、日露戦争で日本は勝ったけれども、型紙を作る職人が悪くなって、昭和の戦争が始まった時は、最低になっていた。

これが後で、人間国宝だ、認定だと、職人がおだてられ、何とかかんとか幾らかでも質が戻ってきたわけです。それですから皆が仕事の価値を認めて、その仕事をおだてることによって発展していくわけです。

認定が始まった時に、親父のところに文化庁の担当者が大蔵省の担当者を連れてきて、こういう人間に助成金を出してくれって、予算の交渉をしているわけ。そうしたら、うちの親父が何と言ったかというと、「職人に金を与えたなら碌なことをしない。酒を飲むか、道楽するか、どちらかだ。」と（笑）。「金なんか与えたって駄目だ。おだてろ。」といった。そうすると大蔵省の役人が、そうだ、そうだと言って帰っちゃった。やっぱり職人をおだてる、またその職人が仕事を続けられるように考える。これが基本です。

ここにも書いてあるけど、安全・快適です。職人の生涯を安全・快適にしなかったら滅びちゃうんです。

* * * *

今日の水害に対する話にしても、これを貫かなかつたら駄目なんです。

私の家が、傍から見たら異常なくらい水害に対する準備をやっている様に見えたので、こうして引っ張り出されて話をさせてもらっています。



左から小宮康孝さん、小川信子さん、中川榮久さん

私の家は、関東大震災で丸焼けになりました。その時は、浅草で再建したんですが、昭和4年にこんな所にいたんじゃ命は幾つあっても足りないというので、この新小岩にお世話になったんです。

ところが昭和9年に隣のやつが保険金欲しさに自宅に火をつけたので、丸焼けにされました。戦時中の昭和20年には、爆弾がうちの真ん中に落ちてきました。また、22年に利根川が決壊してここは水害になりました。これだけいろいろと災難を受けましたから、親父には、これに対抗するには、しっかり備えをしなきゃいけないというのは骨身に沁みていきました。

私もそれを見ているから、終戦後、一番最初に作ったのが機織工場、その時に身分不相応な3階建ての倉庫も作りました。それから小さな社宅、そして自分の住居、そういう順番で再建してまいりました。

安全・快適というものは、一番重要なのですが、この新小岩は安全という面では最低だと思います。うちの親父が、何で知っているながら、こんな土地に居を構えたのかと、そう思っていました。

利根川が切れた場合に、昔は切れた水が亀戸や向島とか浅草とか、向こうにみんな行きました。それが、荒川放水路が出来て、立派な堤防があるので水は向島の方には行かない。

東側はというと、市川との間に江戸川があるから向こうへは行かない、利根川の切れた水はここしかくる場所がないんですよ。必ずここに来ちゃう。

それを知っていたから、私は、昭和22年に利根川が切れたと聞いて、「考え方よ、絶えず用意せよ。」という親父の教えを思い起し、すぐに徹夜で品物を片付け、そこに床を張り、寝られる様に準備したんです。

ですから、うちは濡らしちゃいけいものは、紙一枚濡らさないで、被害を最小限に食い止めることができました。

その時町内では、今は風呂屋がありますが、あそこの前に舞台を組んで、のど自慢大会やどんちゃん騒ぎ、みんな水なんて来るもんかと言っていた。一般の人は、そうしてたんですが、私は親父と一緒に洪水に備える用意をしていた。というのは、自分が住んでいる土地の地形と癖を知っていたからです。

懐中電灯なんてあまり無かった時代ですから、よく昔の露店なんかでやったもんですが、カーバイトを使うアーク灯という照明、夜はそれをおいて片付けをしました。くたびれると、その場にゴロンと寝て、4日から5日で片付けました。

人から色々な話を聞いて知識を得ることは大事ですが、自分が住んでいる場所を自分でじっくり考えることが一番大事です。

私の型紙は、伊勢の白子というところで出来ています。伊勢湾台風の後、私は白子に行きました。

その時聞いた話ですが、水が来たからと屋根の上に逃げた人は、台風に吹っ飛ばされて死んじゃったそうです。天井裏に上がって、屋根に穴あけて、何時でも屋根の上に出られるようにした人は、流れて来たものにつかまって助かったと。

ところが今の家は、天井裏に上がって、屋根に穴をあけられますか。下からでは、どんなことをしたって抜けないじゃないですか。

そこで、今の家はどうしたら助かるかを考えなければいけない。その状況、状況で、みんな違うんです。そういう中でどんな準備をするかを考えるのが一番肝心かと思います。

うちの親父というのは、今考えたら異常な親父でした。関東大震災で自分の家が丸焼けになっているのに、家族をほっぽらかし震源地に近い所を回って歩いていました。

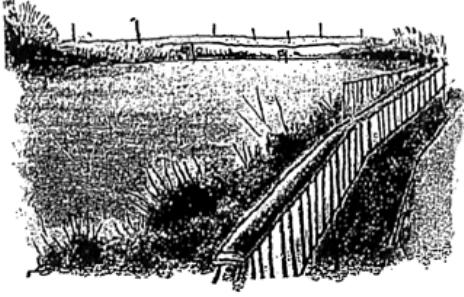
瓦の乗った立派な家はみんな潰れた。ところが、バラックのボロボロでも、トタン屋根の家はみんな残っていた、それを見て帰ってきました。

空襲のときは、家の真ん中に爆弾が落ちて、全部吹っ飛んじゃいましたが、家族は防空壕にいて助かりました。

防空壕を造るマニュアルには、壕の周りを板で囲って、そこに泥を詰めた土嚢で固めてガードしなきゃいけないとありました。

ところがこんな低湿地ですから、泥を詰めようとしても、ちょっと穴を掘れば水が湧いた。そこでうちの親父は、大成化工さんがボイラーや石炭を焚いて残った石炭ガラを貰って、それを詰めたんです。





防空壕は、爆弾が落ちたところから8mぐらいしか離れていませんでしたが、今流行の柔構造の発砲スチールみたいな壕でしたので、家族は傷一つ負わずに助かったわけです。

災害に備えるにはマニュアル通りじゃなく、その場に応じて考えることが大事なんです。

* * * *

私はこうして伝統のある江戸小紋染師になっているから、昔の古臭いことをやっていると皆さんにお思いでしょうけれども、とんでもない。

伝統とか常識というものは破るものなんです。自分の欲で破るからいけない。お客様のために良いだろうと思って破るのはいいと信じております。

私のやっていることは、昔からの染めじゃなく、染料は化学染料です。色やけを無くして、お客様が着やすいように全部改良したんです。

着物というものは、色が焼けないで、日にも干さないで、お客様が汚さなかったら、永久に新しい訳です。

世の中に、そういうものがないんならしょうがない。でも世界にはあるんです。

イギリスの紳士服は非常にお高い。これを着ている人は、何年着ても着崩れしないじゃないですか。それからペルシャの絨毯なんか何年経っても変わりませんが、あれにしたって、染めてるわけです。

そういう所から知識とか何かを引っ張り出してくれば、何とか出来るものなんです。

失敗するというけれど、欲でやったことは失敗だ。欲がなかったら、物事なにをやったって失敗という事はありえない訳です。

やってみて、これは駄目だということが分れば、それも成果なんです。

皆さんの貴重な時間をとってしましましたが、この後よろしくお願ひします。

〈トークセッション〉

- ◇小宮康孝（人間国宝・江戸小紋染師）
- ◇小川信子（日本女子大学名誉教授
・当NPO評議員）
- ◇中川榮久（東新小岩七丁目町会長）
- ◇渡邊喜代美（当NPO理事）

〈渡邊〉 始めに30分程でとお願いしましたら、ぴたり30分でした。お見事ですね。小宮さんのお話はいかがでしたか。

〈小川〉 小宮さんのお父様の言葉は、すごく重いし、小宮さんのバックボーンになっているんですね。小宮さんは、伝統とか伝承というのをあらゆる困難を乗り越えてここまで守って来られましたが、これから日本の日本で、小宮さんの言われる「纏うような衣服」が伸びて行くかどうかすごく気になる所です。どうお考えですか。

〈小宮〉 婦人服というものは、身体に服をすっぽんとかぶして、手と足と首を出したもの。着物というのは腰紐1本で身体に括り付けちゃう。だから着物は自分の身体の一部にならなきゃいけない。洋服は、使い捨て文化、着物は、お母さんのものは、洗い張りして着る、だから使い捨て文化じゃないんですよ。

私は、お母さんの着物を思い出と温もりを糧に着て欲しいと言っています。着るために、色が焼けちゃったりしたら、どうにもなりません。色焼けしない生地・着物を作つて文化を残せと孫に言っています。

孫が初めて江戸小紋をやりたいと言った時に、型紙があり、設備があり、お客様がこのままであれば、成長は出来るだろう。でも着物というのは、大きくは伸びられないよと言いました。

ただ一つ、孫が安心できることは、この不景気な商売には競争相手が出ない。この商売、やり手がないんだから、細々とやれ。これで江戸小紋が残つていけばいいんじゃないかなと。

この日本の型染め文化を見たアメリカ人が、写真版で完全につくるスクリーン印刷を発明しました。

これが世界中に広まって、インドネシアの蝶
けつとか、ジャワ更紗、インド更紗、世界中の
プリントがみんなこの作りになっちゃった。

それからICチップのプリント基板、これも
型染めから発展したものです。

これだけ貴重な世界の文化の基になった様な
ものを何とか滅ぼしたくないというのが私の信
念です。

今までにも、何人もの若い人が仕事を教えて
くれといって見えました。

それでも私は、この商売は食えないからやめ
ろといって、全部お断りしました。案の定、次
々にやめられて、うちの商売が細々と残ってい
る状態です。

〈渡邊〉 中川さん、染物師とか浴衣職人たちもこ
の街には居たようですね。

〈中川〉 私もここで生まれ育って、ずっと川の傍にい
るもんですから、この川の周りで浴衣とか手拭
いとか、中川で晒したものを高い櫓の上から干
しているのを毎日見ながら育って来ました。

小宮さんも川と密着した生活をされてこられ
たと思いますが、その辺をお聞かせください。

〈小宮〉 昭和4年に親父がこの土地に水を求めてき
た。昔の染めというものは、擦り付けて染める。
これが小紋の原型なんです。染みとか染めむら
があって、これを何とかしなくちゃというので、
中川や江戸川の水で洗ってみました。

それはもう汚くて、親父はとんでもない所に
來てくれたなと思いました。

でも地域の皆さんに、私は本当に助けられま
した。どもりで、落ちこぼれの寂しい子でした
が、いじめられた記憶はありません。

それを治してくれたのはこここの自然です。池
があちこちにありエビが釣れ、中川ではフナが
釣れる。河原には葦が一杯生え、満ち潮になれば
水が浸かり、引き潮になれば干潟で、縁もあ
ればカニもいて、自然が一杯ありました。

〈渡邊〉 水害の体験もお聞かせ頂けますか。

〈小宮〉 利根川決壊の時、水が来ると聞いて、同業者
が小さな舟を二つ持っていたので、親父が一つ

借りてきました。

水が来たというので、荷物を担いで、土手に
避難しました。二度目に自分の家に行くと、そ
の間に水はどんどん上がって、電柱に掴って「助
けてくれ」と叫んでいる人とか、埠の上で動け
ない人がいて、舟で助けました。

川が切れると、水はジワジワでなくサーと上
がっちゃうんです。

〈渡邊〉 中川さんは、町会で避難訓練をされてますね。

〈中川〉 今ここに住んでいる人たちは、水の怖さを知
りません。水は怖いという危機感を持ってもら
うことが大事ですね。

〈小宮〉 私は軍隊で毎日毎日、爆弾を抱えて戦車の下
に突っ込む訓練ばかりしていました。その時に
隊長は、「お前らが何でこんな厳しい訓練をする
か分かるか。いざという時に、考えてたんじゃ
間に合わないんだ。訓練をしていれば考えない
で、とっさによけられる。お前らを死なせたくない
から訓練しているんだ。」と言いました。こ
れは、実際に危険を体験した人間にしか分から
ない言葉だと思っているんです。

〈小川〉 水質によって仕上りが違うのですか。

〈小宮〉 染めの良し悪しが水によって変化するよう
な染めじゃしょうがないんです。汗かいたから色
が変わっちゃったなんていうことじゃ駄目です。

〈渡邊〉 最後に括って頂けますか。

〈小宮〉 私がこれまで続けて来られたのは、これしか
やることが無かったからなんです。親父も私も
関東大震災でボシャって残っているのは自分の
腕だけ。隣の放火で丸裸になってしまって、爆弾で家
を飛ばされても、残っているのは自分の腕だけ。
私は能がないから、お客様の為を思ってやって来
ただけでした。それで最後に人間国宝になった。
有り難いことです。やっぱり運がいいというか、
でもあまり棚ぼたを食い過ぎてこんなになった
んじゃしょうがないですね。

〈渡邊〉 一時間という短時間でしたが、何があっても
江戸小紋染師としてたくましく生き抜いてこら
れた小宮さんのお話を伺いとても感動し、勇気
付けられました。ありがとうございました。

江戸川、葛飾両区の治水対策に望む

伊東春海（当NPO会員・江戸川区在住）

昨年（平成20年）の夏、江戸川区役所から洪水ハザードマップが各戸に配布された。区が苦労して作ったハザードマップが、各家庭でどうなっているのか気になっていた。配布しただけでは、活用が期待出来ないからだ。

ところが昨年9月に区から町会毎に説明会をするとの知らせがあり、町会会館に行った。ハザードマップ制作の目的や活用方法など一般区民にも分かる見事な解説を聞いて、区の3分の2が東京湾満潮面以下のゼロm地帯で、避難先が遠距離であることを知った。これでは高齢者や病弱者はどうなるのだろうと心配になってきた。

たまたま葛飾区新小岩北地区連合町会の主催で、当NPOが共催し、11月15日200名が参加して避難訓練が開催されることになった。

この訓練の下準備として、10月24日、参加者25人が予定避難先の松戸市21世紀の森へ区の避難方法通りに公共交通機関を利用して行った。私もNPOのメンバーの一人としてお手伝いさせて頂いた。

下見参加者は、新小岩駅に10時集合、JR線に乗車し、西船橋駅で武蔵野線に乗り換え、新八柱駅で下車した。市道を通って同市千駄堀の21世紀の森管理事務所に到着した。

この間約一時間半であったが、参加者の確認、乗車券の購入、一般客に迷惑を掛けない乗車の在り方、高齢者や車椅子利用者の扱い方、混雑時の西船橋駅での乗り換え、八柱駅下車後の確認、歩道幅員の狭いでこぼこ道、一般市民とのすれ違いでの迷惑回避など、200人の集団が移動する訓練の本番を想定して歩いてみた。こうした問題点を事前に把握し、本番では的確に対応する力が試されることを思い知らされた。

この訓練は新小岩北地区連合町会の各役員が役割分担し、しっかり準備して、見事な連携プレーで取組んでいる。

定例的行事が大方の町会活動の中で、時代の変化に対応した活動への取組みは、組織を活性化させるばかりでなく、若い人の役員誕生に繋がっているように思えた。

それは、彼等の顔つきや行動から窺がうことが出来る。今回は加盟各町会毎に参加希望者を募っての避難訓練であるが、災害発生時は本当に大丈夫であろうかと思うと戦慄が走るのを覚える。

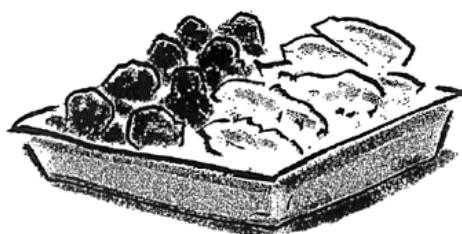
* * * *

低地帯の各区では、洪水の恐れのある時は、早めに避難勧告を出すので、落ち着いて冷静に避難して貰いたいとしているが、未知の難問が数多く控えている様に思える。

そのこともあって、江戸川区では、避難先の市川市側へ渡る江戸川の橋が、13kmの間に市川橋など3橋しかないことから、市川橋と江戸川大橋の間に新たな橋を架橋しようと準備を進めている。

同様の意味から、葛飾区は松戸市側へ渡るのに、新葛飾橋から下流には市川橋まで橋がない。

このように考えてみると、将来の高規格（スーパー）堤防の一部をなすものとして、新小岩公園や篠崎公園のほかに中川に面した三菱製紙跡地などは、近距離避難場所としてどうしても高台化の実現が喫緊の問題であることが分かる。江戸川、葛飾両区とも区民の安全・安心のために最優先の課題として、取組んでもらいたいのである。



全国まちづくり会議2009 in 川崎

—当NPOがパネル展示とトークセッションに参加—

2009年9月21・22日、全国まちづくり会議が日本都市計画家協会が主催し、川崎市の後援により川崎市サンピアンで開催されました。

当NPOは、広域ゼロメートル市街地研究会と共に、これまでの活動をパネルにまとめて出展すると同時に、テーマ「川の恵みと脅威・・・気候変動をにらんで、防災・環境面から川とまちの関係を考える」と題してトークセッションを行ないました。

河川に縁のある地域の川との関係は、自然の恵みと脅威の両面を持っています。

水の恵みは、大いに生かして暮らしに取り込み、その豊かさを享受できるよう様々な努力がなされています。水の脅威に対しては、確実に備えるリスクマネジメントが欠かせません。今後の不確実な気候変動を考えると一層重要となります。

「川の恵みと脅威」とまちづくりをどのように融合

させて都市計画するか。地域が抱えるリスクを市民はどう受け止めて安心快適なまちづくりを確実にしていくビジョンを持つか。水の恩恵と防災、親水と浸水という両極の課題を共有して情報交換する。そして、ここでの議論をベースにして、親水・浸水に新たな問題提起をしあえるプラットホーム作りをしたいという呼びかけに応えて、多方面から素敵なお達が素晴らしい活動報告を持って参加されました。

●パネル展示

パネル展示では、全国から多様な活動が紹介され、同時にそのフロアで意見を交換しました。

当NPOのパネル作成作業は、塩崎さんが担当し、素晴らしい出来上がりでした。

パネルと共に配布した冊子「洪水に備えて」、街づくりニュース、シンポジウムの記録「大規模水害に地域で備える」等も大変好評でした。

<プログラム> 日時：9/22 13:00～15:00 場所：サンピアン川崎 2階第2交流室

司会：渡邊喜代美（NPO ア！安全・快適街づくり、広域ゼロメートル市街地研究会）

第1部：川とまちを考える

1. 「ヨーロッパにおける浸水・親水まちづくり」：メルテム・セノール・バラバン（東京大学）

第2部：川からまちを考える

— 地域の親水活動をまちづくりに生かす・地域の元気 —

1. 「吉野川の親水・環境まちづくり」：中村英雄（NPO 新町川を守る会）
2. 「江東区の親水・環境まちづくり」：須永淑子（NPO 江東区の水辺に親しむ会）
3. 「多摩川水辺の活動」：鈴木眞智子（NPO 多摩川エコミュージアム）
4. 「Eポートの活用と川の駅」：橋本正法（NPO 地域交流センター）

第3部：まちから川を考える

— 脅威の体験から地域リスクをまちづくりに生かす・地域の底力 —

1. 「NPO ア！安全・快適まちづくり 活動の問題意識」：石川金治（NPO ア！安全・快適街づくり）
2. 「防災・水防ワークショップに参加して」：東原洋子、赤穂邦美、中川栄久（葛飾区）
3. 「広域ゼロメートル市街地 2058PLAN」：塩崎由人（広域ゼロメートル市街地研究会）

第4部：ディスカッション まちと川をつなぐまちづくり

— 親水・浸水からまちづくりを考える・ビジョンを持つ —

- ◆ コメンテーター：小川幸男（墨田区）
- ◆ コーディネーター：加藤孝明（広域ゼロメートル市街地研究会、東京大学）

●トークセッション

トークセッションでは、当NPOからはコメントーターとして、中川栄久さん、赤穂那義さん、東原洋子さん、石川理事長が参加しました。

石川理事長は、ア！安全・快適街づくりの活動の問題意識について説明し、東原さん、赤穂さん、中川さんは、防災・水防ワークショップに参加した体験を語りました。

徳島から駆けつけたNPO新町川を守る会理事長の中村英夫さんは、多彩な活動で地域の活性化に多大な貢献をしているという素晴らしい報告をされました。

東大のトルコ人留学生メルテム・セノール・バラバンさんは、フランス、ドイツ、イギリス、オーストリア、オランダ等の水と関連した都市政策について、映像を使って紹介しました。

江東区の水辺に親しむ会の須永理事長は、運河を残し、水と親しむ活動を続けていますが、川との付き合いは利根川上流に及び、水の脅威を自覚した活動もしています。

また、NPO多摩川エコミュージアム事務局長の鈴木眞知子さんは、川を教師として、川の怖さも素晴らしいも体得させる教育的活動をされていますが、その取組みに目を見張りました。

NPO地域交流センターの橋本正法さんは、Eボート（手漕ぎ大型カヌー）を活用し、川の駅を作る運動を行い、地域興しにもつながる幅広い活動をされていました。

そして、当NPOの伊東春海さんは、今回はNPO荒川クリーンエイドの代表として参加しました。

川の清掃活動の体験から社会の有り様を分析し、ごみの捨てられ方に、時代背景や社会の闇を見て、親水の活動の中で環境と街づくりを考えることが大切だといわれました。

司会は渡邊喜代美、まとめは加藤孝明さんが担当しました。多くの知恵が集まれば、まちづくりに新しい力強い方策を提言できると強く感じたセッションでした。
(渡邊喜代美)



トークセッションにコメントーターとして参加した当NPOのメンバー（右から中川栄久さん、赤穂那義さん、東原洋子さん、石川理事長、伊東春海さん）

毎日新聞が 当NPOの活動を紹介

去る7月15日の毎日新聞朝刊「くらしナビ・安全・安心」のページに当NPOの活動を紹介する記事が掲載されました。

当NPOの石川理事長と徳倉副理事長が取材を受けました。二人が高校時代に遭遇した水害体験を生かし、東京東部の低地帯を水害から守るためにNPOを設立したこと、その後NPOが主体となってシンポジウムやワークショップを積極的に開催、行政と地元住民が一体となって水害対策に取組めるよう後押しをしていることを「助け合う」のコラムに紹介しています。

地域の皆さんのが主導の活動へ

◇◇◇ 石川理事長に聞く ◇◇◇

- (編集) 21年度の活動は、4月19日と5月17日の相次ぐワークショップ(WS)で幕を開けましたね。
- (石川) WSは、5月に7回目の開催となりました。若い研究者グループの方々や大学院生の皆さんにしっかりサポートして頂き、地元の皆さんを主導にした活動として地域に根ざしつつあります。
- (編集) 研究者の皆さんには、新小岩地域のNPOの活動をフィールドとして重視して取組んでいます。
- (石川) これまで注目されていなかった地震水害対策を街づくりの重要な枠組みとし、WSの活動をきちんと整理して着実に研究成果を生み出しています。
- (編集) WSに参加された地元の皆さんのは意は相当なものですね。
- (石川) 4月のWSを主催する東新小岩七丁目町会は、まとまりがよく、これまでしっかりと地域活動に取組んでいました。意識が高く意のある人が多いと思います。WSの活動により、当NPOの活動が地域に根ざし、奥行きの深い活動になってきたと思います。
- (編集) 11月15日に、新小岩北地区連合会と協働して「避難実地訓練」を計画しています。
- (石川) 「避難」を核にして、地域の連帯と地域の盛り上がりに寄与したいと考えています。また、広域避難出来ない災害弱者や逃げ遅れた人のための緊急一時避難先の確保の重要性を認識していただく機会として充分に活用したいですね。
- (編集) 地域の皆さんのが主導となった活動の広がりにより、当NPOの事務局には入る方が出で来るといいですね。
- (石川) 活動の具体的な取組みのため、地元の方が事務局会議に参加することが増えてくるでしょう。
- (編集) 地元の方の役割が大きくなりますね。ありがとうございました。

石川理事長 地域再生支援のための 規制緩和策を提言

—「新小岩北地区荒川左岸の
高規格堤防化」について個人提案—

「地域再生支援のための規制緩和策の提言」は、内閣官房地域活性化統合事務局が6月30日を締切日として募集したものです。

当NPOの石川理事長は「高規格堤防採択基準の緩和」について、個人として提言を提出しました。

河川局長の通達では、「都市の再開発とスーパー堤防の建設」を同時施工するのは、街づくりが先行して、そのままで、手戻りが生じるなどその後のスーパー堤防の施工に障害が生ずる時に限って認められています。

これでは西新小岩地区のように、既に区画整理が行なわれている場合には、スーパー堤防の建設が出来ないので、通達とは逆のケースを提案しています。このため、荒川下流河川事務所、東京都河川部、葛飾区、当NPO、学識経験者からなる事業化研究会を立ち上げることも提案しています。

西新小岩三丁目の場合は、区画整理済ですが、河川先行でやれないかを課題として、この研究会で取組むことを目指しています。

会員募集中です！

問い合わせ先 事務局
電話・FAX 03-3696-7480

発行	特定非営利活動法人 「ア！安全・快適街づくり」
	〒124-8565
	東京都葛飾区西新小岩3丁目5番1号
	Tel・Fax 03-3696-7480
E-Mail	tegami@banktown.or.jp
ホームページ	http://www.banktoen.or.jp

